

地震発生直後の体験（1995年3月号掲載・伊藤 力）



地震が発生した悪夢のような明け方、私は消防職員待機寮で寝ていた。今までに体験したことのない凄い揺れで跳び起きた。慌てて寮のベランダから外を見ると、須磨区、長田区、兵庫区のあちこちから火の手が上がっていた。これは一大事と思い、同じ所属の職員と自家用車で灘消防署に向かった。

出発した当時は火災のことしか頭になく、JRの高架沿いに車を走らせていると、「まさか、こんなに家が倒壊しているなんて」と、茫然としてしまった。

それ以上に長田区の炎上火災や中央区の高速道路の崩壊には驚かされた。

その現場を横目で見ながら消防署に到着した時には、消防車が1台もなく、庁舎の前には、「うちのおじいちゃんを助けてください」「消防は何してんねん。早ようちに来んかい」とパニック状態の市民で溢れかえっていた。消防・救急の両係長が必死で対応している。

庁舎を見ると防火台の上部が崩壊しかかっている、非常に危険な状態となっていた。我々は、服を着替えるため庁舎内に入ると、書棚やロッカーなどが散乱し、とても着替えどころではなかった。とりあえず防火着を私服の上に羽織り、管内で発生している火災現場や建物の倒壊現場へと向かった。